

言語の「自然態」を捉える言語理論の必要性

黒田 航*

寺崎 知之**

*(独) 情報通信研究機構 (NICT) MASTAR プロジェクト 言語基盤グループ

**京都大学大学院

1 「ネットことば」の実態を説明できるか?

1.1 ネットことばの逸脱性¹⁾

インターネットで使われる言語使用 (通称「ネットことば」) には「誤用」が多い。ネットことばに特有と思われる例を (1)–(5) に幾つか挙げる:

- (1) 「時間をもてあそぶ」(「時間をもてあます」ではない)
 - a. ...手洗い洗車のため時間をもてあそんでいたひっさーが何気なく...
 - b. ...疲れた時にでもクリック連打して時間をもてあそびてみます
- (2) 「熱血感」(「熱血漢」ではない)
 - a. ...とどまることなくヒートアップ。このスピード感と熱血感あふれる展開がたまらない。
 - b. ...もしかすると内に秘めた熱血感があるのかもしれない。
- (3) 「門外感」(「門外漢」ではない)
 - a. ...常に傍観者であればいいとの門外感さえもあった。
 - b. ...PT、OT、ST っていうような療法士も福祉関係の国家資格になっているのに...門外感はあるなあ。
- (4) 「衰弱さ」[「脆弱さ」や「貧弱さ」ではない]
 - a. 自分ではどう解決していいかわからず、素直に衰弱さを受入れて...
 - b. 保護した時の衰弱さはどこにいったのか同じ犬とは思えない。
- (5) 「啞然さ」
 - a. それを見ていたじいちゃんばあちゃんの啞然さが笑えますね ~ ^ ^
 - b. この後突然の福田首相の辞任会見、これには驚きと啞然さが頭を支配。

単に「これらの用例はネットことばにありがちな誤用だ」と言えば、それで言語学者の役目は終わりなのか? そうでない。特にインターネットのコトバの実態は言語の「自然態」だとすれば、そう言うことは問題の解決になっていない²⁾。

問題を整理するため、誤用と逸脱を概念的に区別しよう:

- (6) 用例 A 中での語句 X の生起に逸脱が感じられる場合,
 - a. X を別の語句 Y に書き換えた用例 B でその逸脱が解消されるなら、用例 A 中の X は Y の誤用である。
 - b. X を別のどんな語句に書き換えてもその逸脱が解消されないなら、用法 A は X の逸脱した用例である(が誤用ではない)。

¹⁾ 本節で挙げる事例は (1) を除いて第二著者によって収集された。

²⁾ 統語現象として見ると、問題の誤用は McCawley [3] の言う統語上の擬態 (syntactic mimicry) の事例になっている。だが、それは記述的一般化としては妥当であっても、事態の発生原因の説明にはならない。

この基準で評価すると、(1)–(5) に挙げた例の一部は逸脱用法であっても誤用 (法) ではない。(1) の例であれば、(1a) では「時間をもてあましていたひっさーが...」と書き直して逸脱性が解消される。従って、「時間をもてあそぶ」は「時間をもてます」の誤用だと言える。これに対し、(1b) では「?*時間をもてあましてみます」と書き直しても逸脱性が解消されず、新たに別の種類の逸脱性が生じるだけである。従って、誤用ではなく逸脱用法であると言うべきである。

本質的な問題は、後で詳しく論じることになるが、問題の誤用や逸脱用法が少なくとも小さなグループ内で正用化する傾向が認められることである。更にそれがグループ外に広がって標準語として正用化する可能性がないとは、実際のところ誰にも言えない。

1.2 ネットことばの「乱れ」の原因

このような事例にインターネットで遭遇する率は意外なほど高い。それを見て多くの人々—特に言語学者と呼ばれる人々—がインターネットの言語使用は乱れていると言う。それは一見して明らかであるように思える。だが、私たちはそこに「合理性」を見いだすことはできないのか? 具体的に言えば、ネットことばは単に乱れているのではなく、今までは編集された書きコトバに強く機能する検閲により抑制され、発現する機会がなかったコトバの自然態が表われているものだと考えることはできないのだろうか?

私たちがそう言う理由は、次のような用法進化のモデルを使った説明が可能と思われるからである:³⁾

- (7) a. 多くの言語使用者は、「うる覚え」に基づいてコトバを使用している。
- b. インターネットが利用可能になる前、書きコトバは誰かの「編集」と「認可」を経て人の目に触れるようになっていたが、インターネットではそのような規制がないため、うる覚えに基づいて産出された表現が抑制されないで、实例になる。
- c. 規制を受けない实例のほとんどは、本来は淘汰されるべき「誤用」なのだが、その一部の少数グループ内で認証され、「正用化」する傾向がある。

これらは次の点で生物進化に対応する: (i) (7a) は個体 (の表現型) が遺伝によって決定されるという事実に、(ii) (7b) は不適応な個体 (の表現型) が淘汰されるという事実に、(iii) (7c) は適応した個体 (の表現型) だけが存続する事実に対応する。

インターネット以前のコトバの使用は規制されていた。より正確には、それらはすべて記者や作家や学者や出版者や編集者という言語使用の権力者によって (自主) 検閲されていた。ネットことばは、それ以前の書きコトバと違って、コトバの使用の権力者の管理の外にある。インターネットのコト

³⁾ 新語生成の説明では、(7a) の役割が小さくなる。

バが「乱れている」のは、書き手による(自主)検閲という「見えない権力」の機能が弱いからである⁴⁾。ネットことば特有の用法の揺籃は、用法規制の弱体化の低下によってうる覚えに由来する誤用(法)や逸脱用法への淘汰圧が弱くなり、それらの生存確率の増加と、そのような誤用法の外適応率の向上によってもたらされたものである。これはヒトの言語が記憶基盤でアナロジー基盤 [12] に成立する「用法の生態系」であるならば、起こって当然の事態であり、特に異例なことだとは思われない。言語の生態進化論的見地に立てば、ネットことばの乱れは起こるべくして起こったと言うべきである。

1.3 言語の自然態を正しく捉えるために

私たちが意識する問題は次である: 「ネットのことばは乱れている」と嘆く多くの言語学者は、事態の必然性を理解しようとしなない。彼らはコトバの「自然態」を見ていない。

インターネットの爆発的普及によって、言語処理技術は進歩し、かつ深化した。それは不可欠な使用データが増え続けたからである。だが、それと同時に、標準的な言語理論が期待するコトバのあるべき姿(=架空態)とコトバの実態としての自然態との乖離がどんどん大きくなっている。それにもかかわらず、言語理論はインターネット普及以前からまったくと言って良いほど進歩していない。

この不釣り合いを解消するためには、言語の(架空態ではなく)自然態を正しく捉えることのできる言語理論が必要である。以下で私たちはその必要に応えようと思う。

2 言語使用の経済を考える: 「脱」言語学試論

2.1 コトバ(の特定の用法(の意味))が通じる理由

以上の問題にアプローチするために、(8)という根本問題を考えることから議論を始めよう:

(8) コトバ(の意味)が通じるのはなぜか?

通常の言語理論内には、この問いに対する論点先取にならない答えはない。理由は次の通りである: 言語学では、(8)への答えは(9)である:

(9) コトバ(の意味)が通じるのは、それを保証するための(「文法」と呼ばれる)規則の体系 Σ があるからである。

この想定の下で、言語学の課題は、 Σ の正確な記述とその諸特性の説明だと定義される。だが、(9)は(8)への答えとして表面的なものであり、不十分である。コトバの意味が通じることを保証するための規則の体系 Σ があるというのは、「コトバの意味が通じる」という事実の説明としては論点先取である。論点先取にならない、「深い」答えを見つけないなら、他の可能性を探らなければならない。

言語学が成立する以前に回帰するようだが、私たちは次のように言おう:

(10) コトバ(の意味)が通じるのは、それが特定のグループ内で確立した慣習だからである。

この定義に満足しない人は数多いだろう。その理由は「(確立した)慣習」とは何かが未定義だからである。私たちは R. Sugden [7] に従って慣習を進化ゲーム理論に基づいて定義し、古い定式化を新しい革袋に入れることにしたい。

2.1.1 「慣習」とは何か?

まず、関連する箇所を次に引用する:

- (11) 慣行 (practice) がある集団 [=グループ] の中で慣習 (convention) であるとはどのような意味かを考えてみよう。こういうときにはたいていは、グループのすべて、あるいはほとんどすべての人がその慣行に従うという意味である。しかし、それ以上の意味もある。誰もが食事をし、睡眠をとる。しかしこれらは慣習ではない。ある慣行が慣習であるときは、「なぜすべての人が X をするのか」という問いに対して、「なぜならほかのすべての人が X をするから」ということが少なくとも部分的な答えを成している。

さらに、事態は違う風に生じていたかも知れないという意味もある。つまり、すべての人が X をするのは、ほかのすべての人が X をするからではあるが、ほかのすべての人が Y をするからすべての人が Y をするということが生じていたかも知れないのである。もし「なぜすべての人は Y ではなく X をするのか」という問われたら、まったく答えることができないであろう。なぜイギリスでは車は右側でなく左側を走るのであるか。この慣行ができあがったことには、疑いなく歴史的理がある。しかし、イギリスのほとんどの運転者はこのことを知らないだろうし、またそれを気に留めさせないだろう。これは確立した慣習なのだと言えば充分であろう [7, p. 40]。

ここでの定義は、言語の文法や語句の用法にも当てはまる。これは偶然ではなく、言語の本質が慣習性にあることを意味している。Sugden は続けて次のように慣習を定義する:

- (12) 慣習とは、2 つ以上の安定均衡 (または ESS [=Evolutionary Stable Strategy]) を持つゲームにおける任意の安定均衡⁵⁾である、と定義することにしよう。この定義のポイントをつかむために、安定均衡 (または ESS) は、あるゲームを互いの中で繰返して行なう人々の集団に対して定義されていることを思い出そう。戦略 I が、そのようなゲームにおける安定均衡 [解] であるとは、次のことを意味する。すなわち、他のすべての、あるいは他のほとんどすべての人が戦略 I をとっているならば、どの人にとっても戦略 I をとることが自分の利益となることである。したがって、安定均衡は自己拘束的な規則と解釈しうるのである。しかし、自己拘束的な規則のすべてが、慣習と呼ばれるルールになるのではない。自己拘束的な規則が慣習とみなされるのは、もし一度その規則が確立したとすればそれとは異なる自己拘束的な別の規則を想定できるときであり、またそのときに限る [7, p. 40]。

2.1.2 コトバの「用法」とは何か?

(12) のような慣習の定義がない状態では、言語学者が「用法」を論点先取にならない形で定義するのは難しかった—少なくとも言語学内の閉じた系内では無理だった。しかし、今は事情が異なる。(12) のような慣習の定義のおかげで、用法に意味のある、実証可能な定義を与えることが可能になった。次のように言えばよいのである:

- (13) コトバが確立された慣習である状態とは、(ゲームの戦略としての) コトバの用法の体系が安定均衡状態になっている状態である。

⁴⁾ このアナロジーを追求するなら、インターネットの普及は、権力で規制されていた「用法の市場」に急激な自由化をもたらしたとも言える。

⁵⁾ ゲーム理論で言うゲーム g の安定均衡 (状態) とは、 g のどのプレイヤーが戦術を変更しても (少なくとも短期的には) 誰も変更前の状態を上回る利得を上げられない戦略の組み合わせ (別名 Nash 均衡) である。

先の(10)が(8)の答えとして論点先取でないのは、慣習を明示的に定義し、(13)のように規定する場合に限られる⁶⁾。

(13)の定義を裏返せば、次のように用法の認定基準になる:

(14)「用法」とは言語ゲームで戦略になる任意の要素である。

用法は語であっても、句であっても、超語彙的パターン⁷⁾であっても、完全な文であっても、不完全な文であってもよい。ゲーム理論の要請に従えば、形式的単位は問題ではない⁸⁾。もっとも抽象的な意味では、統語論も用法の一種である。ただし用法の必要条件は述べておいた方がよい。

用法は、(ゲームの戦略がそうであるように)戦略として選択可能なものである。発話時の選択には次の二つの場合がある: (i) 話し手Aの意図Iが決まっていて、Iを表わす表現を選択する場合、(ii) 話し手Aが産出を予定している表現eが決まっていて、eで何を意味するか選択する場合。(ii)はeが曖昧な場合に必要になるが、通常は(i)を考えるだけでよい⁹⁾。

言語使用者の進化ゲームと用法の体系としての言語自体の進化(ゲーム)は区別する必要がある。言語使用者と言語自体は共進化するものだが、それらの進化は同一視可能ではない。前者では、個々の言語使用者が「種」かつ「個体」であり、個々の表現=用法がゲームで個体が選択する「戦略」である。後者では、表現=用法が「種」かつ「個体」である。後者では、何が「戦略」であるかははっきりしない。従って、本稿が第一に考える進化ゲームは前者である¹⁰⁾。

用法の定義が可能になったので、次に言語ゲームの性質をより詳しく検討する。

2.2 投機かつ投資としてのコトバの使用

言語の本質が慣習性であるなら、それから次のことを積極的に認める必要が出てくる:

(15) 個体Aは自分の発話sが相手Bに通じるかどうかを、sの効果を確認することに先立って知ることはできない。つまり、Aは自分の発話sをする時、sで自分の意図がBに通じることに「賭け」てそうするしかない。

その理由は、Aが使った表現eでBにmが通じる理由が、「eの発話者は通常ならそれによってmを意味し、かつm*を意図する」という慣習が確立しているからであり、「eはmを意味する」という規則があるわけではないからである。

⁶⁾ この定義は、Wittgenstein [5] が言う意味での「言語ゲーム」を、(進化)ゲーム理論が言う意味での「(進化)ゲーム」の一種だと再定義することが可能にする。これがWittgensteinの本意に合うかどうかはわからないが、私たちにとっては有意義である。Sugden [7, p. 11] の与える「ゲーム」の定義は次の通りである: 「ゲームとは、多数の個人すなわちプレイヤーが相互に依存していて、各プレイヤーにとっての成果が、自分自身だけでなく、他のプレイヤーが選択した行動にも依存するような状況のことである」。要するに、複雑適応系のエージェントの挙動は、すべてゲーム理論の言う意味での「ゲーム」である。

⁷⁾ 超語彙的パターンの定義は [10] を参照されたい。

⁸⁾ 構成体文法 (construction grammar) [1] の基礎をここに見いだすことも理論的には可能である。構成体=構文とは用法を記述する様々な規模や複雑さの言語単位だと言えば十分である。だが、用法の精緻な定義があれば、構成体=構文という概念は不要だろう。

⁹⁾ なお、ここでは聞き手の戦略は問題にしない。これは明らかに不十分だが、本稿ではこの問題には目をつぶって議論を進める。それは聞き手の戦略は単層ではなく、詳細を明確にするのが難しいからである。

¹⁰⁾ 本稿では追求しないが、後者の場合、言語を表現の生態系として定義する必要が生じる。そこでは、個々の用法が種に対応し、個々の発話が個体に対応し、話者グループが個体群にとっての環境に対応する。

それ故、Aが自分の発話sが相手Bに通じたかどうかを厳密な意味で「知る」ことはできない。Aにできるのは、sを聞いたBの反応に基づいて、それが通じたか通じなかった(か通じなかった)と想定することだけである。

2.3 使用されるコトバの「経済」

ここで(8)への答えの探求は、経済学も視野に入れた大きな目標の探究になることが理解できる。というのは、問題の特徴をもつヒトの個体間の発話というやり取り (transaction) は、次の意味で投機的 (speculative) である上に投資的 (investmental) なものだからである。発話が投機的なのは、BがAの発話sを理解することが何らかの「規則」で保証されていない(少なくとも、保証されているという前提をもつ必要がないと考える) からである。発話が投資的なのは、Aによる発話sが、それなりの労力E (=費用) を伴い、その出資が、Bによるsの理解という見返り (return) Rを見こんで行われる(賭け=投機) からである。ここでBによるsの理解という結果が、Aにとって効用U(s)をもつとすると考えれば、ヒトの発話は投資という形の経済活動と見なせる。

この投資で、効用U(s)が労力E(s) (=出資) を上回るならば、Aは得をする。そうでなければ、Aは損をする。効用U(s)が労力E(s) (=出資) を上回らないのは、(i) (Aが期待していたほどの) 理解が得られなかった場合か、(ii) 誤解されるかの2つの場合である(損失はおそらく後者の方が大きい)。

2.4 言語の「自然態」の理論の基礎

以上の理論化は、コトバの現象論を経済学的視点から与えることを可能にする。その際に、補足的に次のように考えると、生態学的で社会生物学的な妥当性を追加できるだろう:

- (16) a. 慣習は個体グループごとに成立する。
b. 慣習が成立する個体のグループgの規模には、生態学的に見て自然な上限がある。
c. 個体は、相異なる慣習 c_1, c_2, \dots が成立するグループ g_1, g_2, \dots に(活動の時間が異なるのであれば) 選言的に属していてもよい。
d. 異なるグループ g, g' に成立する慣習 c, c' は、 g, g' に共通のメンバーがいる率が高いほど類似度が高くなり、 g, g' に共通しないメンバーの率が高いほど非類似度が高くなる。

これらを言語の自然態を決定する(か少なくとも可能性を制約する)基本原理として認めると、次のことが予測される:

- (18) 慣行 (=個々の語句の使用) を平均化することで、グループごとに独自に成立していた慣習の一部は必然的に見失われる [(16b) と (16c) の帰結] それを避けるには、グループごとに用法を特定しなければならない。
(19) 特定の個人内部でも、言語使用は一様ではない [(16c) の帰結]

2.4.1 正用と誤用の境界を決めるもの

本稿にとって重要なのは(16)の次の帰結である:

- (20) 「正用」と「誤用」の境界を決定するのは、用法の体系という慣習を共有する個体グループであり、グループごとの用法の体系を平均化して得られた言語(やその文法)ではない [(16d) の帰結]

少なくとも「正用」や「誤用」という概念は、正用性を決める慣習を共有するグループを特定しない限り、意味がない。慣

習性の観点から見て本質的なのは「通用する用法」であって、正しい用法=正用ではない(実際、通用する用法と正用が一致しない場合があり、それは外国語の修得で時々問題になる)。用法が通用する確率は、通用性を評価する単位が大きくなるほど低くなる。言語学者が用法 u が言語 L の正用であると言う時、その正確な意味は、評価単位を最大限に大きくした場合、すなわち L のすべての使用者間で u が通用するという意味である。だが、この条件を満足するような用法は、実際には人々が日常的に使っている用法の一部でしかない。

2.4.2 用法の普及の条件

グループ内での用法の確立とは別に、あるグループで確立した用法の他のグループへの普及=伝播を考える必要が出てくる。このためには、コトバの使用者は、異なるグループからなる複雑ネットワーク [8, 9] をなしていると考えればよい。

この自然な想定と (16d) の原理から、特定の用法の普及に関して、次の予測ができる:

- (1) 用法 u が、複数のグループに属している影響力の大きいメンバー (Gladwell [6] の言う意味での「コネクター」であり、複雑ネットワーク理論で言う「ハブ」であるようなメンバー) のお気に入りの用法であり、かつ Sugden [7] の言う意味での「目立ち¹¹⁾」をもつ用法であるならば、 u は複数のグループに伝播し、結果的に全グループに普及する可能性が高くなる¹²⁾。

特定の用法はグループ内で確立するだけでなく、グループ外に伝播もする。それが成立する仕組みは、複雑ネットワーク理論が正しければ、病気の感染の仕組みと同じであるはずである。ただ、これは普及した用法がどれほど存続するかを予測しない。それには別の説明が必要である。

3 終わりに

3.1 コトバへの(行動)経済学的アプローチ

本論文はインターネットでのコトバの使用実態を言語の「自然態」だと見なし、それをうまく捉えることのできる理論を提示することを目標とした。そのために、私たちはコトバの(行動)経済学的基盤を追求し、その中でコトバの自然態を基礎づけるための理論的考察を行なった。今の段階では、聞き手の反応のモデル化が欠けており、本論分の提案に十分な信頼性があるとは言えないが、提示モデルは、(i) 用法を平均化することで言語使用の実態には決して近づかないこと、(ii) 誤用と正用の境界がグループに依存し、文法レベルでは与えられないという説明は与えると思われる。本論文が「言語の自然態を正しく捉える言語理論」の序説として理解されることを私たちは期待する。論文を終えるにあたって、コトバへの(行動)経済学的アプローチの含意を述べたい。

3.2 (行動)経済学的アプローチの含意

本稿の議論は、コトバへの(行動)経済学的アプローチが可能であり、かつ有意義であることを示唆した。それからは幾つか重要なことが派生するが、そのうち、特に本稿で指摘しておきたいのは、次である: コトバの基盤の言語学内部での「通説」に反して、その基盤はヒトの知性や認知の仕組みに選

元できない可能性がある。理由は二つある。

まず、ヒトの経済感覚 \approx 損得勘定が、限定合理性に基づくものであることを示す多くの行動経済学 [11] からの証拠があるという意味で、コトバのやり取りの経済を重視する言語観は、生成言語学が説くような合理主義的言語観とは矛盾する。

第二に、神経経済学 [2] が示しているように、ヒトの経済感覚 \approx 損得勘定は認知的にはなく情緒的に駆動されている可能性がある。これは認知言語学が説くような概念主義的言語観とも矛盾する可能性がある。少なくとも用法の確立は認知の仕組みで決まるという楽天的な決定論に根拠があると信じてよいだけの証拠は揃っていない。また、身体性基盤をもち出したところで、その内実が不明確である以上、問題の解決になっていないのは明白である。

3.3 新しい語用論のために

この二つを念頭に置けば、「コトバとは意味と形式が対になった記号の体系である」という自明の理よりも言語学を先に進めることができるのは、コトバの使用は経済活動の一部であるという認識に基づいた語用論 (linguistic pragmatics) の再定義だと期待するのは、決して過度の期待ではないだろう。なお、関連性理論 [4] にはそのような期待がもてそうでもないのは、第一に関連性理論では与えられた表現の解釈の最適性を問題にするだけで、本稿で取り上げた話し手の投機の部分にまったく焦点が当たっていないところ、第二に関連性理論の想定する解釈の最適性の計算で、労力と(効用と関係づけられた)効果のトレードオフが視野に入っていないところに理由があるのも明らかだろう。だがそれは、経済学と整合性のあるモデル化を試みれば、関連性理論が「化ける」可能性があるということでもある。現状を見る限り、生成言語学や認知言語学が言語の自然態を正しく表わす理論になる可能性よりは、関連性理論がそうなる可能性の方が高いだろう。

参考文献

- [1] C. J. Fillmore. The mechanisms of 'Construction Grammar'. In *BLS* 14, pp. 35–55. BLS, 1988.
- [2] P. W. Glimcher, C. Camerer, R. A. Poldrack, and E. Fehr. *Neuroeconomics: Decision Making and the Brain*. Academic Press, 2008.
- [3] J. D. McCawley. *The Syntactic Phenomena in English*. University of Chicago Press, Chicago/London, 2nd edition, 1998.
- [4] D. Sperber and D. Wilson. *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell, 2nd edition, 1995.
- [5] L. Wittgenstein. *Philosophical Investigations*. Blackwell, 1958.
- [6] M. グラッドウェル. 急に売れ始めるにはワケがある. 飛鳥新書, 2000.
- [7] R. サグデン. 慣習と秩序の経済学: 進化ゲーム理論アプローチ. 日本評論社, 2007.
- [8] A. L. パラバシ. 新ネットワーク思考: 世界のしくみを読み解く. NHK 出版会, 2002.
- [9] D. ワッツ. スモールワールド・ネットワーク: 世界を知るための新科学的思考法. 阪急コミュニケーションズ, 2004.
- [10] 黒田 航 長谷部 陽一郎. Pattern Lattice を使った(ヒトの)言語知識と処理のモデル化. In 言語処理学会第 15 回大会発表論文集, pp. 670–673, 2009.
- [11] 友野 典男. 行動経済学: 経済は「感情」で動いている. 光文社, 2006.
- [12] 佐藤 理史. アナロジーによる機械翻訳. 共立出版, 1997.

¹¹⁾ [7] の翻訳者は salience の訳語に「突出性」を宛てているが、これには抵抗を感じる。私たちは代わりに「目立ち」を宛てることにした。

¹²⁾ コネクターの存在と際立ちの二つが文法化が必要条件だと仮定するのは、理論的に面白い方向性である。